



お茶の水女子大学  
Ochanomizu University

**コスモス**(COSMOS)は、  
Career Opportunity Support Model for Ochanomizu Scientists の  
頭文字をとった本プロジェクトの愛称です。

お問い合わせ

女性研究者支援プロジェクト推進室・情報バンク

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学 人間文化研究科棟 202号室  
TEL/FAX 03-5978-5520  
URL <http://www.ocha.ac.jp>  
e-mail [frsp-info@cc.ocha.ac.jp](mailto:frsp-info@cc.ocha.ac.jp)



文部科学省科学技術振興調整費  
女性研究者支援モデル育成プログラム  
**女性研究者に適合した  
雇用環境モデルの構築**



お茶の水女子大学  
Ochanomizu University



## ご挨拶

このたび、科学技術振興機構の女性研究者支援モデル育成プログラムに、お茶の水女子大学の「女性研究者に適合した雇用環境モデルの構築」が採択されましたことはまことに喜ばしいことでございます。

今年度から始まりました第三期科学技術基本計画では、自然科学系の女性研究者を5年間で25%にするという目標を設定しています。現在日本では文系も含めた女性研究者の割合は11.6%といわれています。自然科学に限定するとこの数字はずつと低くなると予想されます。そのような現状を鑑みますと、目標の25%を達成するにはよほど工夫が必要です。

幸い本学では、女性科学者の育成について130年を超える伝統があり、日本で最初の女医、荻野吟子、日本初の女性理学博士保井コノをはじめ、多くの先駆的な女性科学者を育成してまいりました。この伝統は今でも脈々と受け継がれ、卒業生が多く機関で研究実績を挙げております。現在、本学の女性教員の割合は40%となり、自然科学系の教員数も国の目標にほぼ達しております。しかし、職種が上位になるにつれて女性教員の割合は低下しております。そこで、この現状を踏まえ、本学としては国の目標を確実に達成する一助となるべく応募させていただき、採択され、プログラムを開始いたしました。

このプログラムは、本学教員の中から、研究に最も力を発揮できる年齢にあり子育て中でもある理系の5名を対象として、どのような環境が整えば子育て中の多様な問題を乗り越え、研究においても最大の力を発揮できるか、という課題に迫るという実験的な試みです。そしてさらに、他の大学や組織においても適用可能な雇用環境モデルの構築を目指しています。

このプログラムには、優秀な女性研究者を育てた経験から、あるいは自身の研究者としての体験をもとに、本学教員がメンターとして加わること、また、学外の方々にお願いしてアドバイザリー・ボードを組織し、人材育成の観点からご参加いただくことも必要だと考えております。

研究者自身は仕事を勤務時間中に能率よくこなさなければならないのは当然ですが、研究者が心置きなく定時に子どもを迎えに行けるためには、全学的な意識改革も必須です。既にマスコミでしばしば取り上げられています、いわゆる「9時-5時」勤務を実現するには、会議は5時までに終わるように効率的に進行することや会議の数そのものを減らす工夫もしなくてはなりません。これについても、ワーキンググループが綿密なロードマップを作成中です。

優れた研究の原動力は未知の世界に踏み込む意欲と情熱であることは言うまでもありません。それに加えて、思い切り時間を使って研究に集中できる環境も必要です。研究を志している若い人々がその意欲を持続し、期待される成果を、否、期待以上の成果を挙げられる雇用環境の整備に全学で取り組む決意であります。

今後ともお茶の水女子大学にどうぞ皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



平成18年8月1日 大学会議室でオープニングセレモニーが行われ、本プログラムのスタッフ全員に辞令が手渡されました。

学長 郷 通子

## 日本を代表する女性研究者を輩出してきた系譜

### History

お茶の水女子大学は、明治7年、本学の前身である東京女子師範学校設立の布達に始まり、明治23年には女子高等師範学校が日本最初の女子のための高等教育機関として開校以来、130余年にわたり、各分野でリーダーの役割を担う女性を世に送り出してきました。

これまでの歴史の中で、数多くの理系の優れた女性研究者を輩出してきましたが。先駆的な役割を果たした卒業生には次のような研究者がいます。（敬称略）

### 保井 コノ(1880-1971)

日本初の女性理学博士



1927年に、日本で初めて女性として、東京帝国大学から理学博士号を授与された。1898年に女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）に新設された理科に進学。卒業後は教師を勤め、1905年に新設された研究科に入学し、動植物学を専攻。最初の論文「鯉のウエーベル氏器官について」が、『動植物雑誌』に掲載された。これは、日本の女性科学者として初の科学論文とされている。博士論文は、日本産石炭の研究であった。世界的な細胞学・遺伝学雑誌『キトロギア』の編集・刊行に携わった。

### 黒田 チカ(1884-1968)

日本初の女性理学士



1906年女子高等師範学校卒業後、同校研究科を修了して、1909年東京女高師の助教授に就任した。1913年に日本で最初の女子帝大生として東北帝大に入学。1921年から文部省外国留学生として、英國オックスフォード大学に留学。帰国後は、理化学研究所で紅花の色素の構造研究を始め、「紅花の色素カーサミンの構造決定」を発表し、保井コノに次ぐ2人目の女性理学博士となった。1949年に新学制下のもとお茶の水女子大学の教授に就任した。

### 辻村 みちよ(1888-1969)

日本初の女性農学博士



1913年東京女子高等師範学校理科卒業後に教師となり、その後北海道帝国大学の食品研究室に副手として勤務した。東京帝国大学医学部を経て、理化学研究所員となり、食品学、栄養化学、生物化学を研究。その中でも、緑茶に関する研究に取り組み、緑茶のビタミンC含有やカテキンの発見、渋みの成分タンニンの分子構造を明らかにした。「緑茶の化学成分について」で東京帝国大学から農学博士の学位を受け、日本で初めての女性農学博士となった。

### 湯浅 年子(1909-1980)

日仏の学術文化交流に貢献した原子核物理学者



1932年東京女子高等師範学校理科卒業後、東京文理科大学に進み物理学研究に従事した。1940年に渡仏し、キュリー夫人ゆかりの研究所で原子核研究に進んだ。「人工放射性核から放出されたβ線連続スペクトルの研究」により、1943年フランス国家学位（理学博士）を取得。1938年から1955年まで本学で教鞭をとった。1949年からの二度目の渡仏では、フランス国立中央研究所やパリ大学原子核研究所の研究員となり、国際的に活躍した。

明治 7年 お茶の水女子大の前身、東京女子師範学校設立の布達

明治 8年 「御茶ノ水」（現文京区湯島1丁目）の地に開校

明治 18年 東京女子師範学校を東京師範学校に合併、東京師範学校女子部となる

明治 19年 東京師範学校が高等師範学校と改称

明治 23年 高等師範学校から女子部を分離し、女子高等師範学校を設立

明治 41年 奈良女子高等師範学校の設置に伴い、東京女子高等師範学校と改称

大正 2年 日本で最初の女子帝大生として、黒田チカ、丹下ウメ、牧田らくが東北帝大に入学

大正 12年 関東大震災のため、校舎焼失

昭和 2年 保井コノ、東京帝大より理学博士号を授与され、日本初の女性博士となる

昭和 7年 現在地（文京区大塚2丁目）の新校舎に移転

昭和 9年 辻村みちよ、初の女性農学博士となる

昭和 18年 湯浅年子、仏の理学博士号取得

昭和 24年 「お茶の水女子大学」設置

昭和 50年 女性文化資料館設置

昭和 61年 女性文化資料館を廃止し、女性文化研究センターを設置

平成 8年 女性文化研究センターを廃止し、ジエンダー研究センターを設置

平成 14年 お茶の水女子大学保育施設いづみ保育所（現いづみナーサリー）設置

平成 15年 子ども発達教育研究センター設置  
総合情報処理センター設置  
開発途上国女子教育協力センター設置

## プロジェクトの紹介

## Project

女性研究者支援モデル育成プログラム「女性研究者に適合した雇用環境モデルの構築」は、平成18年度文部科学省「科学技術振興費」による委託事業として採択されたプロジェクトです。このプロジェクトでは、子育てをしている理系の女性研究者の研究を支援するという画期的な試みを通じて、女性が仕事と家庭の両立を図りながら、優れた研究成果をあげるために、どのような支援が適切かつ効果的であるかを検証していきます。また、この研究を通じて、少子化や女性の理系離れといった現代日本の直面する課題の解消に向けての可能性を見出すべく、女性の雇用環境という問題に取り組んでいきます。そして、日本最初の女性のための高等教育機関として、長年にわたり優れた女性研究者を輩出してきたお茶の水女子大学ならではの、21世紀型ワークライフバランスを実現する「お茶大モデル」の構築を目指します。

### 「女性研究者に適合した雇用環境モデルの構築」事業内容

- ① 女性研究者を取り巻く質的・量的環境の整備
  - a) 女性研究者支援メニューの提供
  - b) 勤務時間9時から5時の徹底化
  - c) 学内保育所と隣接する独身寮の連携による支援
- ② 女性研究者支援のための情報環境の整備：女性研究者支援「情報バンク」の設置
- ③ 女性研究者育成のための人的交流：ロールモデルによる理工農系を目指す若い女性の啓発及び活動のDVD化

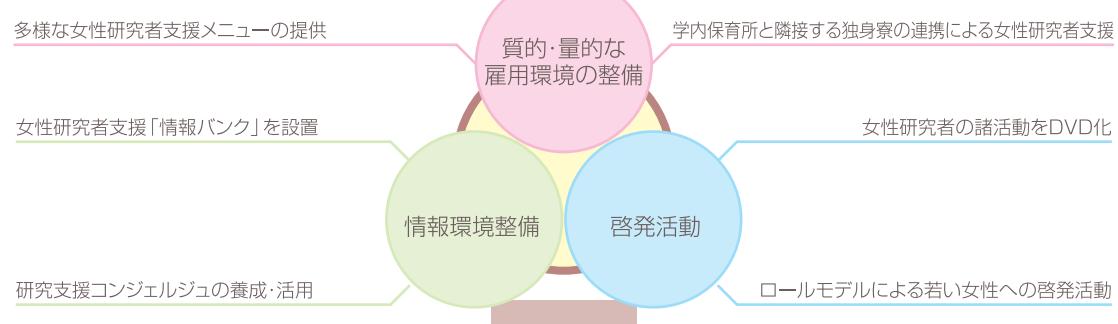
支援メニューの他にも「勤務時間9時から5時の徹底化」を実現することにより、仕事と家庭を両立する21世紀型ライフスタイルの実践例を示せるように、全学をあげて取り組んでいます。また、女性研究者が活躍するために必要とされる諸情報を「情報バンク」に蓄積し、支援体制を整備します。さらに、社会への普及を目指す試みとして、ロールモデルの活動のDVD化や講演会を通じて、啓発活動を行っていきます。

### 雇用環境モデルの実施・検証

#### 学長の強いリーダーシップ

全学的な意識改革・会議減少・事務の専門性向上

#### 〈勤務時間9時から5時〉の徹底化



### 評価の指標作成と社会への普及

## 研究者グループの紹介 (50音順)

## Research

### 優れた研究成果をあげるために

子育て中の女性研究者が優れた研究成果をあげるためにには、どのような支援が必要で効果的であるか、という問いに応えるため、学内公募によって選ばれた女性研究者5名に、一般公募で選抜されたリサーチ・フェロー2名（ポスドク研究者）とアカデミック・アシスタント8名を配置して、研究チームを組み、活動を開始しています。女性研究者の比率が高い本学ならではの経験知に裏付けられた、実効性のある成果が期待できる取り組みです。



相川 京子 理学部化学科助教授

ストリート美代子(AA)、川本元子(AA)

専門分野は細胞生化学で、特に糖鎖科学の研究を中心に生体分子の構造、分子間相互作用、機能などの解析を行っています。研究成果を医療や創薬に役立てることも目指しています。6才の長女がおり、また今年6月に長男を出産しました。幸運なことにこのプロジェクトが発足し、研究のアクティビティを維持したいと思い応募しました。アカデミックアシスタントのおふたりも共に子育て中であり、9時～17時を基本勤務時間として「高い計画性と固い意志」をモットーにお互いを切磋琢磨しています。



近藤 るみ 理学部生物学科講師

島田光世(AA)、福本彩子(AA)

生物がその環境に適応した嗅覚を獲得してきた過程には、どのようなDNAの変化があるのか。多種多様な匂い分子を受容する嗅覚受容体に着目して、生物の適応進化の具体像を明らかにすることが主な研究のテーマです。研究室のメンバーは大学院生の吳宮さんと、アカデミック・アシスタントの島田さんと福本さんです。研究に憧れている息子(中1、小3)があり、子供達が訪ねて来ても受け入れられる本学の温かい雰囲気に対応されています。教育・研究とその環境整備への取り組みを通して、日本の女性研究者育成に貢献できればうれしいです。



古川 はづき 理学部物理学科教授

河村聖子(RF)、小林千矢子(AA)

専門は「中性子散乱」で、現在の研究テーマは「中性子散乱による強相関電子系の物性研究」です。平成17年2月に出産し、育児と仕事の両立の厳しさに直面していたところ、本プロジェクトが始まるとき聞きました。現在は、娘を大学の保育所に預け、毎日9時～5時で仕事を行っています。「娘が近くにいてくれる」—そのことが私にとっては大きな安心感をもたらしており、仕事に集中することができます。また、リサーチ・フェローとアカデミック・アシスタントの方々とも、子育てと仕事の両立を目指すという共通項で、研究ばかりではなく、精神的な面においても多大な支援を受けています。



水村 真由美 文教育学部芸術・表現行動学科助教授

横尾咲子(AA)、日野間佳子(AA)

専門領域は、身体運動科学で、運動中の生理応答や動作の画像解析から人間の身体や動きのメカニズムを調べています。子どもから高齢者、日常生活からダンスまでさまざまなヒトと運動が研究対象です。私は一昨年体調を崩し、子育てをしながら研究を進める現実の厳しさに直面した矢先に本プロジェクトに出会い、応募しました。現在は、2名のアカデミックアシスタントのサポートを受けて、元気を取り戻しつつあります。超元気印の息子(4歳)との時間も私の元気の源です。



矢島 知子 理学部化学科助手

Jahan Ishrat(RF)、宮本恵子(AA)

現在3歳の娘を養育中です。私の専門分野である有機化学は実験が不可欠ですが、なかなかまとまった時間がとれないことが悩みでした。このプロジェクトの支援を最大限に活用して、社会に還元しうる研究成果を挙げ、かつ、次の世代を任せうる子供を育てることは、真的持続発展可能な社会の構築へつながると考えています。今回、このようなプロジェクトに参加できることを感謝し、効果的な支援モデルを構築できるよう、身の引き締まる思いで頑張ります。

## 女性支援室紹介

Support

お茶の水女子大学では、他の大学に先駆けて、平成16年に女性支援室を設置し、学生はもちろん教職員を含めた大学全体の女性の支援を行っています。

女性支援室では、女性の活躍を支援するための様々な企画と立案を行っています。そのひとつが、科学技術振興調整費による「女性研究者に適合した雇用環境モデルの構築」です。また、学部生と大学院生を対象とした「女性リーダー育成プログラム」では、優れた女性リーダーになるために必要な『資質とノウハウとパワー』を強化し育成することを目的としたプログラムを提供しています。①女性が少数派である様々な場において、的確な発言によって自己主張する訓練、②重要なポジションを得るノウハウの獲得、③優れた女性リーダーとして現在活躍しているロールモデルの方々から、大勢を統率するノウハウの学習、④自ら講演会を企画・運営する訓練を通して、女性リーダーとしての資質開発を推進します。

### 菅本晶夫女性支援室長よりメッセージ



女性支援室において様々な計画を立案したが、その過程で多くの人々の意見に耳を傾けた結果、自分の意識が変革した。女性が社会で活躍するためには、様々な困難を一つずつ解消しなければならないが、「仕事と社会を両立させるライフスタイル（勤務時間9時から5時）」の実現こそが、抜本的な解決方法であると教えられたのである。研究の道は一人では到底進めない険しいいばらの道である。私は子育てと家庭をすべて妻に委ねて、内助の功に支えられてこの道を歩んだ。前世紀における日本の典型的なライフスタイルである。この自らの経験から、他人の援助なしに女性が研究の道を歩むことの困難さが良く理解できる。もしも研究を支援する人が大勢いて、周りのライフスタイルが変革すればどうだろう。このような「新しい雇用環境モデル」の構築実験が本学で始まったのである。多くの優れたスタッフが集結した。どんな成果が得られるのか楽しみである。そして今世紀の早い時期には、女性にとって男性にとっても、多様なライフスタイルが実現されることを願っている。

ここでプロジェクト推進室を紹介しよう。推進室は情報バンクの構築及びプロジェクトを検証しモデルを構築する役割を担っており、藤枝修子特任教授と栗原知紀特任講師をリーダーとして、アカデミック・アシスタントの渥美裕子、戸張泰子、長島東子、曲尾雅子が活発に活動を行い、女性支援室の浪岡亮子が全面的に協力している。プロジェクトの円滑な推進に欠かせない執行部との調整は実施責任者の羽入佐和子副学長が当たり、広報専外課と学術研究課の全面的協力をもとに、プロジェクトは順調に進行している。ご協力頂いているすべての方々に厚く感謝申し上げる。

### いずみナーサリー



お茶の水女子大学では、平成17年4月1日より、国立大学法人では初めての附属学校部の所属となる保育所「いずみナーサリー」が発足しました。

保育所の敷地面積は、175平方メートル、保育室は冬期でも幼児が素足で快適に過ごせるように床暖房装置を備えられています。また、附属幼稚園の園庭に隣接しているため、保育所の幼児と幼稚園の園児がコミュニケーションをとれるようなつくりとなっており、幼保連携の研究の場としても注目されています。大学の中にある保育所として、単なる預かり所ではなく、生涯にわたる女性の学習を保障する場、乳幼児の発達と保育研究の場、子育て支援の場、支援研究の場となるような新しい保育と研究施設を目指しています。

## 近年の全学的な取り組みをご紹介します

Programs

### 21世紀COEプログラム

#### ●誕生から死までの人間発達科学（平成14年度採択）

誕生から死に至るまで、今日、人が遭遇する危機的状況を診断し、解決と克服の処方箋を導き出すために、学内外・海外の発達研究者が連携して、精力的に研究を進めています。

#### ●ジェンダー研究のフロンティア（平成15年度採択）

ジェンダー平等と、多様な個が尊重される男女共同参画社会形成をめざして、さまざまなジェンダーの現代的課題をグローバルな視点から解明し、その成果をアジアから世界に向けて発信することを目的に、活発な活動をしています。

### 国際教育協力イニシアティブ

#### ●開発途上国における女子教育支援のモデル－日本における女子教育経験の応用可能性－

日本の女子教育の経験をふまえた上で、開発途上国における女子教育の問題を解決していくために、アジア、中東、サハラ砂漠以南のアフリカ地域での女子教育の現状を研究しています。また、国際機関や国外の援助機関の女子教育の支援の動向を分析しながら、日本における開発途上国の女子教育支援モデルの作成に取り組んでいます。

#### ●幼児教育分野における派遣隊員支援と幼児教育協力の質的向上

アジア、アフリカなど開発途上国における幼児教育の発展に寄与すべく、現地の実態調査、各国からの研修受入れ事業、本学を拠点とした知的基盤形成などの実績をもとに、青年海外協力隊員への助言や情報提供、現地での活動に有用な教材やツールの開発などの支援を行い、幼児教育分野における国際協力活動の質的向上とネットワーク構築に取り組んでいます。

### 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

#### ●<対話と深化>に次世代女性リーダーの育成（平成17年度採択）

人文社会系分野において、日本研究を中心に専門性を深めつつ、多分野との「対話」を行いながら、「日本」を対外関係のなかで相対的に把握することができる国際的視野にたつ女性リーダーの育成を目指すプログラムです。

#### ●生命情報学を使いこなせる女性人材育成（平成17年度採択）

生命情報学は、生命を情報システムととらえて生命現象を定量的に解明する、近年の発達が目覚しい学問分野です。本プログラムでは、広範な理系の学生が、自らの専門を深めると同時に生命情報学の方法論を身につけ、将来、各分野で独創的研究を立案できるようになることを目指しています。

#### ●ユニバーサルマインドを持つ女性人材の育成（平成18年度採択）

領域横断的な専門性を備え、さらに国境・文化を越えた問題と共有できる「ユニバーサルマインド」を備えた女性人材を育成することを理念とし、これを人間発達科学に適用したのが、本教育プログラムです。

### 教員養成GP

#### ●科学コミュニケーション能力養成プログラム（平成17年度採択）

科学情報を正しく伝え、人々と科学・技術者間のコミュニケーションを促進できる能力が、現代の理科教員に必要とされています。この科学コミュニケーション能力を養うための授業群を、現職教員と大学院生に提供します。